

九年以前には通り得ないと云ふ。地圖の裝飾化されたものとして、は先づ有名な秀吉の扇面地圖につきオルテリユウス一五九五年版より恐らく數年以前に作られた筈で而も日本朝鮮支那の正確なる事前者の比でなく、當時世界最新の東亞輿地圖であるとその學的價值を評し、淨得寺の世界圖屏風に於ては菅田伊人氏が秀吉當時のものであるとされるに對し、之はプロセクションの心得のある人が作つたものでメガラニカ、アニアン海峡をなくしてゐる處より世界知識のよほど進んだ後のものであるとして當初の考へを競へされない。序に日本圖屏風に就いても論ぜらるゝ處があつた。附録は一は佛教徒の世界觀を明らかにし一は嘉永當時の日露交渉に就いて述べたものである。以上によつて著者が本書に於て取扱はれたものゝ大體を紹介したつもりであるが、著者の博學なる東西古今の資料を引證し論說又縱横多岐して到底限られたる紙面に盡す事はできない。筆者の不明によつて妄言を敢てした處又逸脱せる處少くないと思ふ。著者の諒恕を請ふ次第である。之を要するに地圖史を中心とする日本地理學史への貢獻に於て Paul Graf Telch 〆 Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischen Inseln に優るとも劣らざるものであり後進を益する事至大であらう。之を一言にして評するならば書き換へられたテレキとも云はるべきであらう。(昭和七年十一月三十日發行 定價 四圓貳拾錢 刀江書院)〔米倉〕

●讃岐高松石清尾山石塚の研究

梅原末治氏著

京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十二冊

昭和八年の上半期に於いて、日本考古學の天界に二つの彗星たる星が忽然として輝いた。一つの星は後藤守一氏の「上野國佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」であり、他の星は梅原末治氏著の「讃岐高松石清尾山石塚」の研究である。

前者は帝室博物館歴史課を背景とし、後者は京都帝國大學考古學教室を背景として生れ、孰れも我古墳研究史上に於いて忘れることの出来ない地位にあるだけ、この期を同じうして生れた研究は、色々な意味に於いて非常に注意の惹かれるものである。古墳の研究が、今日如何なる程度迄發達して居るかはこの兩書が最も雄辯に物語るだらう。さて、その中後藤氏の著作に就いては他誌で記したので、今こゝに梅原氏の研究報告に就いて紹介し、併せてその出版を記念したい。

本書は、濱田博士の主宰する京都帝國大學文學部考古學教室に於いて發行して常に學界に於ける指針ともなり又一種の測度計の如き地位をも占めて居る研究報告の第十二冊として生れたものであり、我古墳に於いて特殊な構造を有する石塚を研究の對象として居る。即ち讃岐國高松市外の石清尾山上に立つ猶塚・石船塚・姫塚・鏡塚・北大塚・稻荷山姫塚等々の積石によつて構成せられた興味深き古墳に就いて、その構造・出土遺物を考察し、更に後論に於いて石塚の持つ特性を擧げ其年代を考證し、以て

是我古代墓制史上に於いて如何なる位置を占めるかを論じたものであり、尙附録として石枕造附石棺を聚成して一段の光輝を加へて居る。

近時、古墳研究が動もすれば荒涼を覺えらるる折柄、かゝる特殊の古墳の綜合的研究のあらはれたことは、確かに大いなる價值と深い意義とを齎すものであらう。しかもその内容に於いて、その記述といひその考證といひ、穩健にして洗練せられ圓熟にして妥當、さすが氏の勞作と首肯される點が多い。併しながら、穩健圓熟の内容は一面に於いて、一脈の氣魄の缺けて居る憾みを懷かしめないだらうか。或事に身も魂も打ち込んだ若人の持つ様な澀潤たる意氣ときび／＼した力との漂つて居らぬことを物足らなく思つたのは、果して私一人のみの直感であらうか。尙又、この著書に於いて、從來の古墳報告の體裁より一步も外に出でず、石塚なる注意すべき構造の例もたゞ從來の報告の類型に押し込んで居ることは、又物足らなく感じた所である。無論これこそ忠實なる考古學の研究かも知れない。併し、例へば後論に於いて單なる外的研究のみなる從來の型を踏襲する以上に、何等かの内的研究を加味して更に更に石塚の持つ特異性を強調することは出来なかつたか。かくしてこそ初めてこの報告に滾々たる清泉は涌き出でなかつたか。一例せんか。死體を固く封じた積石に對して信仰的方面の考察に幾頁かを割かれなかつたか。積石の壯大なる築造に就いて更に一段の技術的方面の留意が出来なかつたか。無數の積石の運搬利用に於い

て或は記録より或は土俗より或は現代の土木工學の知識より何等かの興味深き考察が導かれなかつたか。

ともあれ、これ等の望對の惑は如何にあらうとも、本著者の我古墳研究史上に投ぜんとする意義の大なることは論を俟たない。古墳研究の難き濃霧を通じて燦然と輝く此等の星の名の永遠に傳はり、その光りの永久に消えないことを祈つてやまない。(四六倍版、一三頁、圖版四五插圖四〇、刀江書院實捌、定價七圓)〔齋藤 忠〕

●賀茂傳説考

肥後和男著

東京文理科大学文科紀要第七卷として發表せられたる肥後和男氏の「賀茂傳説考」は、近時公表せられたる此の種論文中、最も出色のものとして、學界の注意を喚起したい好著である。著者はこの論文によつて唯に山城の賀茂を論ずるのみでなく、それによつて廣く一般に我が古代信仰並にその基礎となりたる古代生活そのもの、解釋に對して、從來諸家の試みし所に更に大なる寄與を加へんとの意氣込を以てこの事に當り、學界の荊棘に更に一條の小徑を通じたかの概を示してゐる。

著者は最初に賀茂の起源に關する資料として、釋日本紀に引用せられたる可茂社に關する山城國風土記の逸文をはじめ、本朝月令所引の秦氏本系帳の文、其他袖中抄年中行事秘抄等から必要な文獻的資料を抽出し、第二章に於てこれ等諸文獻の語を所を解釋するに先だつて、その採用した研究方法たる民俗學的方法に就ての著者の抱懷する見解を簡明に敘述してゐるので